

# 存在しない大学史

## —早稲田大学における幻の学部構想—

### The history of University that does not exist ; Focusing on the failure of faculty development at Waseda University

山本 一生  
Yamamoto Issei

キーワード：大学史・早稲田大学・学部設立構想

#### はじめに

本稿では、早稲田大学を対象に、これまで構想されつつも実現されなかった「幻の学部構想」に焦点を当てる。早稲田大学で設立されてこなかった学部は医学部が最も有名であるが、実は様々な学部構想があったことを紹介したい。こうした実現しなかった学部構想を通して、「存在しない大学史」を描くことを本稿の課題とする。

#### 第一章 女子学生のための学部設立構想

##### 第一節 戦前の旧制早稲田大学での女子学生

早稲田大学の女子学生を一般に「ワセジョ」と言う。早稲田大学公式サイトに拠ると、2018年5月現在で早稲田大学学部学生総数41051人中15558人が女子学生である<sup>1</sup>。ざっと4割近くが「ワセジョ」となっている、と言えよう。この割合を意外と見るか、まだこの程度かとするかは意見が分かれるところであろう。

では、早稲田大学に女子学生はいつから入学したのだろうか。そこで第一節では戦前の「ワセジョ」について早稲田大学の女子学生入学の歴史を以下で概観するとしよう。第二節では、女子学生を対象とした「幻の学部構想」とはいかなるものだったのか、紹介する。

まずは戦前の「ワセジョ」の流れを見よう。第一次大戦後に高等教育の拡充を求める声を受け、1918年に「大学令」が公布される。早稲田大学は「専門学校令」に基づく高等教育機関として1904年に認可されたが、この「大学令」に基づき、1920年2月5日にれっきとした「大学」

として認可された。「大学」への昇格の際、学部での男女共学を目指していたが、結局文部省側の消極的姿勢により女子が正規の学部学生として入学することは許されなかった<sup>2</sup>。

しかし、女子に対して全く門戸が閉ざされていたわけではなかった。戦前の旧制早稲田大学では、第一に聴講生として、第二に早稲田工手学校に正規の女子生徒として入学を許可された。

第一の聴講生についてみよう。聴講生は1921年3月に認可された「早稲田大学聴講生規定」にて「聴講生ハ中学校、高等女学校卒業者、又ハ之ト同等以上ノ学力アリト認メタル満19年以上ノ男女ニシテ志望学科ノ学修ニ必要ナル程度ノ学力考査ニ合格シタル者ニ限ル」（第2条）と規定し、女子に対しても聴講生制度を発足させた。しかし女子聴講生は増加する傾向を示さず、多い年でも10名程度であったという。こうした状況に対して、最初の聴講生の1人であった理工学部聴講の田代美代子は、学部入学への門戸開放と共に、学部予科としての高等学院に女子を入学させるべきだと主張した<sup>3</sup>。結局高等学院の女子入学は21世紀にまで持ち越し、2007年に早稲田大学本庄高等学院が男女共学になって初めて女子の入学が認められることとなった。なお、同じ早稲田大学の直轄校である早稲田大学高等学院は、2010年に中学部が設置されたものの、男女共学は実現していない。系属校の早稲田大学系属早稲田実業学校（早実）は、2002年に男女共学と初等部が開設された。

第二の早稲田工手学校についてみよう。同校は早稲田大学に附属する夜間学校で、1911年に開校し、1948年に廃校となった。入学資格は尋常小学校卒業者もしくはこれと同等以上の学力がある者とされた。つまり、中等教育レベルの学校であった。しかし、女子生徒の入学は少なく、最初に女子生徒が入学した1926年から、その10年後の1936年までに3名の本科卒業生を出したにすぎなかった。女子の学部入学についてその後も学内で議論されたが、1934年の理事会で、男女共学は時期尚早と否定された。女子学生の正規入学の道はこのように困難なものだった。しかし聴講生の中から女子学生昇格運動が起こり、一方で早稲田大学当局も中等学校の教員免許状を持つ女子の編入学を検討し始めた。そして、1938年10月の学部長会議で女子学生の学部入学を検討し、同年12月の理事会で学則を変更し、翌年2月に学則改正が認可された。

その結果、1939年4月に初めて女子学生の学部への正規入学が行われた。学部女子学生が正式に入学したのは、私立の総合大学の中では早稲田大学が初めてだった。正規の女子学生一期生は4名で、以後毎年数名から十数名が入学した。1945年までに文学部・法学部・政治経済学部の三学部合計56名が在籍した。とはいえ、1941年の全学部学生が5563人だったので、正規の女子学生はごくわずかではなかった。しかも、女子の正規入学が認められた1939年以降、日本は戦時体制に突入した。最初の女子学士も1941年12月の第1回繰り上げ卒業と重なってしまう。そのため、十分な在学期間を確保することもできなかった。

## 第二節 「女子学部」「人文学部」「工業経営学部」構想

日本の敗戦後、アメリカを中心とする連合軍に日本は占領され、いわゆる「戦後教育改革」が進められた。こうした中で1947年に教育基本法及び学校教育法が制定され、六・三・三・四制の単線型学校体系が確立した。こうした教育改革を受け、早稲田大学でも学校教育法に基づい

た新制大学の設置に向けた準備が進められた。学内の教育制度研究委員会（1946年12月設置）や教育制度改革委員会（1947年10月設置）での検討を経て、1948年7月に『早稲田大学設置認可申請書』が出された。その結果1949年4月21日に学校教育法に基づく新制早稲田大学が誕生することとなった<sup>4</sup>。

新制早稲田大学の発足を検討していた1948年3月に、「女子学部（仮称）設立趣意書」が作成された。なぜ女子学部を設立しようと考えたのか。以下のようにある。

日本民主化を徹底せしめんが為には女子の協力なくしてこれが完遂は期し難いものであり、しかも従来女子に課せられておつた良妻賢母主義的な教育の中には些少なから封建的な何者かを残存しておつたことも遺憾ながら認めざるを得ないところでありますので此の際早稲田大学は是非ともに新たなる着想に依る女子学部の創設を計らなければなりません<sup>5</sup>。

このように主張した。つまりは、新生日本における民主化を進めるためには、女子学生の存在が重要であるとしたのである。この女子学部の設立目的は以下のようにしている。

先づ知性並に教養の点に於て全く男子のそれと同一水準に達する高度の女性に文化人の養成が眼目であり、在来の良妻賢母主義教育を超えて社会的活動をなす気力を女子に付与したいと考えますが、これは決して単なる所謂職業婦人の養成を目的とせるものではなく、独立せる人格としての文化的女子社会人を造就するわけでありませ<sup>6</sup>。

先の引用部分を含め2回も「良妻賢母主義」を批判した。しかも「職業婦人の養成」を直接の目的とせず、あくまでも「文化的女子社会人」の養成を目指した。結果として職業婦人、つまりは女性の社会進出を企図したが、さらには日本の民主化を担う主権者となることを目指していたと考えられる。

このように強い調子で女子学部の設立を訴えていたのだが、結局新制早稲田大学では「女子学部」「人文学部」「工業経営学部」の設置は見送られた。というのも教育制度改革委員会でこれらの学部設置が検討されたが、設備や教員確保が困難であるという意見があったため実現には至らなかった。

## 第二章 幕張キャンパス構想

### 第一節 創立百周年記念事業の一環としての幕張キャンパス構想

次に、1970年代にあった「幻の学部構想」を見ていくこととしよう。1970年に理工学部の村井資長が新総長に就任する（在任期間は1970年から1978年の二期に亘る）。その際に掲げたのが、「創立百周年記念事業」であった。そこで本節では主に『変貌した大学の改革—早稲田からの提言』（同時代社、1981年）に拠り、「幻の学部構想」について紹介していく。1982年に早稲田

大学は創立百周年を迎えたが、その記念事業として①医学部新設②キャンパス拡張③新中央図書館の建設が1979年に計画された。計画そのものは村井が総長に在任中であった1977年から着手され、成案が出たのは村井が1978年に総長を退任し、新たに清水司が総長に就任した後の1979年だった。なぜ、村井が三期目の総長就任ができなかったのか。それは規定により二期以上の総長再任はできないとなっていたからである。

このように総長の任期を跨いで「創立百周年記念事業」計画が検討され、計画の成案が次の総長に移ってから出されたことに、新旧総長の対立構図が浮かび上がることとなる。対立が特に明確となったのが、キャンパス候補地をめぐるものであった。この対立の背景として、1980年3月の早稲田大学商学部での不正入試問題があるのだが、本稿ではこの事件についての詳述は避ける。

医学部については後述することとし、ここでは海洋学部と農学部についてみよう。実は、千葉県幕張の海岸埋め立て地が理事会の意向として意見が一致した土地であった。この土地に、①放送大学②専門学校③公開講座④総合医科学研究センターと附属病院⑤総合運動場を建設するという計画で、生涯学習を目指すものであった。総合医科学研究センターと附属病院は、後に見る医学部と関係する。村井総長はさらに、用地を早稲田側が確保していた埼玉県本庄市に農学部を建設し、幕張には海洋学部を建設する計画を立てていた。

しかし、前述のように村井辞任後に計画の成案が出ており、その時には清水司総長となっていた。村井は「できあがった計画をみると、私が総長ひきつぎのおり考えていたものの大半が、消え去っていた」とその無念を吐露し、「決定した計画は従来の高教育のワク組みを踏襲した、いかにも魅力に欠けるものになっていた」と恨み節を唱えている<sup>7</sup>。

## 第二節 キャンパス候補地をめぐる紛糾

さらに、キャンパス候補地をめぐる紛糾することとなる。それが、「幕張 対 所沢」として先鋭化するのである。村井に拠ると、候補地は厚木、青梅、多摩ニュータウン、八王子、町田、浦安などが検討され、幕張（海浜ニュータウンA地区）が最適地とされたという。現在は京成幕張駅・JR総武線幕張駅とJR京葉線海浜幕張駅との間にある地区である。ただし「理事会の決定こそ経ていなかったが、ほぼ決定地同様の予定地とされていた」と曖昧な記述となっている<sup>8</sup>。このことがのちに所沢移転の決定的転換点となる。それは差し置くこととして、この幕張に、先の海洋学部と生涯学習関連施設、医学部関係施設を展開するというのが、村井の目論みであった。しかし結局、農学部と海洋学部は、「幻の学部構想」となる。というのも、所沢が候補地として突然出てきたのである。

村井は「まったく予期しなかった「所沢」が、新キャンパス候補地として、突然、浮上してきたのである」と記し<sup>9</sup>、所沢が候補に挙がったことは寝耳に水だったことを伺わせている。所沢三ヶ島地区は丘陵地帯にある私有地で、西武不動産などが所有していた。また早稲田の進出に対して自然保護団体からの反対運動が行われたという。こうしたことが起こりながらも、結局1980年11月に理事会と評議員会が所沢を新キャンパス候補地とすると決定する。前総長の村

井は所沢が候補の有力地として浮上したことを新聞や週刊誌の報道を通じて知り、清水総長に何度も進言したが取り合ってもらえなかったという。村井は完全に蚊帳の外であった。そのため村井は百周年記念事業に向けて行っていた募金実行委員会委員長を辞める表明を評議員に対して送った。これがマスコミに取り上げられて騒ぎとなったため、清水総長は「新キャンパスの用地選定にあたって」という文書を公表し、理事会の方針を説明した。所沢を選定した理由として『早稲田大学100年史』第5巻では6点挙げているが、恐らく重要なのはそのうちの3点であろう。すなわち、「四、本部キャンパス、上石神井の高等学院、東伏見校地との有機的利用が可能であること」「五、地元住民に積極的な誘致の意志があること」「六、埼玉県当局が所沢候補地の取得に積極的な支援を与えてくれ、これが本庄校地の農地転用、開発許可など十数年来の懸案解決に明らかに寄与していること」<sup>10</sup>。この3点は、早稲田と埼玉県との関係、さらには西武グループとの関係を示唆しているように思われる。それは特に四と五である。上石神井、東伏見と所沢を「有機的」に結ぶのが、西武鉄道である。というのも、西武グループの堤義明の後押しがあったからだという<sup>11</sup>。堤義明は早稲田大学第一商学部、父康次郎も早稲田大学政治経済学部の出身と早稲田関係者であることが所沢を選定した理由の背景にあると云われているが、憶測の域を出ない。また幕張には京葉線が通る予定であったが、西武とは関係がなかったことも幕張が外された理由だったと思われる。

### 第三節 所沢キャンパスでの人間科学部開設

結果として、早稲田大学は1985年に新学部「人間総合科学部」として文部省に申請し、翌1986年には文部省の審査結果を踏まえて「人間科学部」とし、同年末に設置認可が下りた。そして1987年4月に所沢キャンパスで「早稲田大学人間科学部」が開校するのである<sup>12</sup>。

『早稲田大学100年史』第5巻では、幕張を候補地から外した理由について、候補地は「軟弱層の上に立ち、地盤・表層土の大規模な改良工事と塩害対策とを要する埋立地であり、それに伴う危険性も予想される土地であることが判明した。予想される買収費用も、幕張の方が遙かに高額であった」と記す<sup>13</sup>。実際、2011年の東日本大震災で幕張地区は液状化により大きな被害を受けたという。しかし、『100年史』では「遙かに高額」としながらも、具体的な額は記しておらず、どの程度高額であったのか分からない。そのため説得力のない記述に留まっている。

一方で村井構想の頓挫について『100年史』では「学苑の現状と記念事業の資金規模は夢の満願成就を許すものではなく、事実の展開はまことにいたし方ない」と<sup>14</sup>、申し訳程度に記すのみである。

### 第四節 幕張キャンパス候補地の今

こうして、幕張候補地は早稲田大学を離れた。では、幕張で計画されていた施設は一体どうなったのだろうか。実は、以下のように展開した。

大学は3校、高等学校3校、専門学校1校などと、幕張新都心の文教地区として発展する。大学は放送大学、千葉県立保健医療大学、神田外語大学である。放送大学は1981年6月の放送大学学

園法の公布施行を受け、翌7月に幕張で設立された。医科学研究センター計画は、1981年に千葉県歯科衛生専門学院と千葉県栄養専門学院が統合して千葉県立衛生短期大学として開学する。さらに2009年に同短大と千葉県立医療技術大学校が統合され、公立4年制大学として千葉県立保健医療大学が創立される。神田外語大学は1957年に東京神田に開設された英会話学校を前身とし、1987年に姉妹校として同大学が開学する。

海洋学部候補地には、昭和学院秀英中学高校と渋谷教育学園幕張中学高校の2校が開校した。両校とも1983年に開学している。早稲田が幕張ではなく所沢に新キャンパスの設置を決定した1980年からわずか3年後のことだった。なお、渋谷幕張は1990年にシンガポール校を設立し、同校は2002年に早稲田大学の系属校となった。幕張と早稲田は、村井構想から約30年後に系属校という形で結びつくこととなったのである。

### 第三章 「医学部」設置構想

#### 第一節 「医学部」設置構想の嚆矢

早稲田における「幻の学部構想」で、もっとも有名なのが「医学部設置」をめぐる構想であろう。現在に至るまで、慶応義塾大学等と異なり早稲田大学は医学部を設置できていない。しかし、構想自体はおよそ100年にわたって表出したり、隠遁したりしているのである。

医学部構想がもっとも早く出されたのが、日露戦争後に創立二十五周年記念の第2期計画の一環として立案された。この計画では理工科と医科の設立が企図された。医学教育と理学教育は大隈重信の大学教育に対する理想であった。しかし、財政状況などの問題を解決できず、理工科は計画通りに新設されたものの、医科設立は「無期延期」となった。

#### 第二節 日本医科大学との合併問題

戦後教育改革期を経て、再度医学部設置問題が議論された。それは、1950年から1953年にかけての日本医科大学合併問題である。提携交渉の最初のきっかけは、1950年に日本医科大学附属病院に入院していた早稲田大学名誉教授の山本忠興が非公式に提案したことに始まったという。その後早稲田側の評議員と日本医科大学側との交渉が進み、1953年に日本医科大学学長を訪問して提携を申し込んだ<sup>15</sup>。日本医科大学側では、この「提携」を「合併」とみた意見があり、併合されるという危機感からの反対と、総合大学の元で教育研究が発展するという期待からの賛成論が対立し、学内外を沸かした。日本医科大学側では1952年7月の定例理事会で最初にこの早稲田との「提携」問題が取り上げられた。こうして同大学内の一部勢力による「提携」運動が動いていたが、1953年9月の定例理事会で学長より運動を起こしている教授に打ち切りを言い渡した。歴史と伝統が異なる両大学の提携は困難であり、早稲田側も「幻の提携申し入れ」となった。要するに、提携申し出自体がなかったことになった。そして日本医科大学側では1954年6月の理事会で、この問題に終止符が打たれたことが確認されたのである<sup>16</sup>。

### 第三節 国立病院払い下げ問題

その直後、1956年に河野一郎農林水産大臣が第一国立病院を早稲田に払い下げるという発言が物議を醸した。同年7月の閣議で日本政府は国立病院を民間団体に移管する方針を打ち出した。その閣議の席上で早稲田出身の河野が第一国立病院を早稲田大学の附属病院として払い下げたいと発言した。しかし、厚生省が強く反対し、払い下げは口先に終わった。さらに創立八十周年記念事業を立案する際にも、医学部創設が議論された<sup>17</sup>。

### 第四節 創立百周年記念事業としての「医学部」構想

次に医学部設立構想が持ち上がるのは、1970年の村井資長が新総長に就任する際に掲げた、前述の「創立百周年記念事業」の一環としてであった。しかしこれも村井の総長退任後の1978年4月に出された『創立百周年記念事業計画委員会小委員会中間報告』では、医学部に代えて総合医科学研究所と附属専門病院の設置が提起された。1979年の最終報告書『創立百周年記念事業計画に関する報告書』では、一体的設置は資金規模などの観点から百周年記念事業から外すことにした<sup>18</sup>。こうして、百周年記念事業として医学部を設置する構想は、潰えたのである。結果として人間科学部が開校したことは、前述した通りである。

なお、同報告書では先に見た農学部構想があった埼玉県本庄の校地は、1980年に附属高等学校（本庄高等学院）の設置が決定し、1982年に開校した。これは同校地の活用問題に端を發した地元対策であったという。

### 第五節 東京女子医科大学との合併問題

2000年代に入ると、早稲田大学は東京女子医科大学を合併して、それを医学部にしようとしているという噂が立ち始めた。そうした噂を裏付けるように、2008年4月に「東京女子医科大学・早稲田大学連携先端生命医学研究教育施設」が設立される。しかし同じ2008年4月29日付「朝日新聞」では、当時の白井克彦早稲田大学総長へのインタビューで東京女子医科大学と合併交渉について触れている。そこで白井総長は「医学部を持っていないほうがメリット」として、医学部の設立には消極的な意見を表明していた。なお、関係者の話では東京女子医科大学との合併交渉は早稲田だけが進めているのではなく、他の有名私大も水面下で交渉しているという。そうした事情もあり、合併交渉は順調ではないようである。

さらに、2011年には茨城県議会が茨城県笠間市の県畜産農業試験場跡地に早稲田大学医学部を誘致の決議案が可決されるというニュースがあった<sup>19</sup>。しかし結局、今に至るまで100年越しの「早稲田の悲願」である医学部設置は実現できていない。

にもかかわらず、2016年1月に「稲門医師会」が設立された。稲門会とは、早稲田大学卒業者で作る同窓組織で、例えば慶應の三田会のような組織である。会員数は同年6月現在で223人だという。参加者は国家資格を持つ医師・歯科医師などである。早稲田を経て、他大学医学部などに編入した者が参加している<sup>20</sup>。医療現場に勤務する早稲田関係者は、意外と多いのである。

## おわりに

本稿では、早稲田大学を事例に実現されなかった学部構想を「幻の学部構想」として紹介してきた。医学部構想が最も有名であるが、それ以外にも農学部、海洋学部、女子学部など様々な学部の構想が作られ、消えていった。医学部構想のように他大学との連携で不調和に終わったり、幕張キャンパスの海洋学部構想のように総長の引き継ぎで新旧総長の対立があったりと、構想が潰れた原因は様々である。しかし、こうした「幻」に終わった原因は、容易に解明できない。なぜ人間科学部ができ、海洋学部ができなかったのか。構想が潰れた原因について追及しようとする、「校史」の口は堅く閉ざされ、「黒歴史」と化す。それだけ、「幻」を第三者が探ることは困難であり、当事者同士の生々しい対立など、語られない歴史が数多くあったことを窺わせる。この点に関し、『早稲田大学150年史』を新しく編纂している方は、以下のように述べている。

学生運動の他には商学部の入試不正事件や成績原簿改竄事件、一〇〇周年事業記念事業に際して幕張と所沢のどちらに新学部を設置するかということで学内が二つに割れた事件なども、戦後の早稲田大学史のある種のタブーとして存在しています<sup>21</sup>。

本稿で見えてきた幕張キャンパス構想のように、「幻の学部構想」という「黒歴史」を発掘してしまった編纂委員は、資料に忠実であるべきだとする歴史家としての使命と、大学執行部に対して表だって批判できない立場との間で葛藤し、その苦渋に満ちた姿が思い浮かぶようである。

## 【参考文献】

- 学校法人日本医科大学『日本医科大学八十周年記念誌』1983年  
真辺将之「早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから－『早稲田大学150年史』にむけて」『早稲田大学史紀要』第47巻、2016年  
村井資長『変貌した大学の改革を 早稲田からの提言』同時代社、1981年  
早稲田大学校友会『早稲田学報』通算1218号、2016年8月  
早稲田大学大学史編纂所『稿本 早稲田大学100年史 第4巻下』1993年  
早稲田大学大学史編纂所『早稲田大学100年史 第5巻』1997年  
早稲田大学大学史資料センター『占領期の早稲田一九四五～一九五二－新生への模索－』2016年

## 注

- 1 <https://waseda.app.box.com/s/9k01gscggniswjiiasp9aqf8cx0xrekv> (2018年9月18日閲覧)
- 2 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』(早稲田大学出版部、1991年) p. 411。
- 3 同上書、pp. 411-412。
- 4 早稲田大学大学史資料センター『占領期の早稲田一九四五～一九五二－新生への模索－』2016年、p. 8。
- 5 同上書、p. 9。
- 6 同上書、p. 9。
- 7 村井資長『変貌した大学の改革を 早稲田からの提言』(同時代社、1981年)p. 30。
- 8 同上書、p. 31。
- 9 同上書、p. 30。
- 10 『早稲田大学100年史』第5巻、p. 988。
- 11 [http://www.excite.co.jp/News/column\\_g/20151212/B\\_chive\\_makuhari-waseda-kankei.html](http://www.excite.co.jp/News/column_g/20151212/B_chive_makuhari-waseda-kankei.html) (2018年9月20日閲覧)
- 12 『早稲田大学100年史』第5巻、pp. 1911-1914。
- 13 同上書、p. 987。
- 14 同上書、p. 990。
- 15 『稿本 早稲田大学100年史 第4巻下』 pp. 502-503。
- 16 『日本医科大学八十周年記念誌』 pp. 99-100。
- 17 『稿本 早稲田大学100年史 第4巻下』 p. 503。
- 18 『早稲田大学100年史』第5巻、p. 983。
- 19 <http://www.wasedawangel.com/wasedadaigaku1/> (2018年9月20日閲覧)
- 20 『早稲田学報』(1218号、2016年8月)。
- 21 真辺将之「早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから－『早稲田大学150年史』にむけて」『早稲田大学史紀要』(第47巻、2016年) p. 250。